

通信表

2020.11.26

玉川第一小学校の2年目は、そのまま持ち上がり、小学4年生の担任となった。隣の学級では新しい学年主任の方が担任となった。

教員1年目を教員として過ごしたことは間違いなかったが、それは身分上のことで、本当の意味で自分は教員だったのだろうか。子どもたちの目は輝いているのに、授業をはじめとして、自分は何もできていない。「これではいかん」と本気で考えた。教員2年目を迎えるにあたり、ようやく本物の教員になると決心した。

1年目の反省点を考えると枚挙にいとまがないが、その一つに、通信表の所見が書けないというのがあった。通信表には担任が文章で子どもと保護者に伝える欄がある。毎日、子どもたちを見ているのだから、書けるものと思っていた。だが、書けない。経験がないということもあるが、理由はそれだけではなかった。

子どもたち一人一人を見ているようで、実は見ていなかった、見えていなかったことに気づかされた。書けない自分がショックだった。「いったい毎日何をしてきたのか」自分が情けなくなった。仕方なく、また郡山の東北書店の2階に行き、すがるように「通信表文例集」なるものを探した。とりあえず買って見たが、実際にはさほど役には立たなかった。それでも書き方のパターンのようなものはわかった。

どうにかこうにか書いて提出した。他の先生方よりも早く出した。当然である。これから何度も何度も書き直しになるのである。その分の時間を計算に入れておかなければならない。恥を忍んでまわりの先生方の所見を見せてもらった。自分との差に愕然とした。そこには子どもたちへの愛があった。

通信表はずっと残る。引越があっても捨てないものの一つではなからうか。あるいは、実家でずっと保管されているに違いない。何かの機会に通信表を開いてみる。54321の数字だけでなく、学級担任が書いた文章も必ず読むはずである。だからこそ、思いを込めて書きたかった。しかし、書けなかった。大人になった教え子たちは、私が書いた通信表の文面を見てどう思うのだろうか。申し訳ない気持ちしかない。一人一人に会って謝りたい気分である。失意のうちに1年目の通信表は終わった。

2年目になった。1学期の通信表作成の時期になった。「今年は書けるだろうか」多少の不安はあったが、子どもたち一人一人の顔を思い浮かべながら書いてみた。すると、今度は書けた。書けるようになった。

1年目との違いは何か。経験がプラスされたことはある。一番の違いは、教員としての覚悟ではないだろうか。表面上は同じようなことをしていても、心の持ちようによって、子どもたちへの伝わり方、その効果が変わってくるのだと思う。教員としての本気度の問題である。

小学3年生、4年生と2年間担任するのである。自分が教員となり初めて担任した子どもたちである。この2年間で、自分にできることはすべてやってあげようと考えた。一人一人力をつけて高学年へと進んでほしいと願った。だが、事態は意外な方向へと進むこととなった。